

『近代文芸の 研究』を読む

安倍 能成



『近代文芸の研究』

を読む

一

過去数年来の自然主義に関する議論を一つ纏めて読んで見たいと思つて、島村抱月氏の『近代文芸之研究』を借りて讀んだ。

最近の我国文壇に於ける自然主義の文学は、決して自分に縁の遠いものではなかつた。この三四年來の自分の思想感情は、やっぱり自然主義的であつた。自然主義の

小説の中には、兎も角も自分の姿を見るといふ心持があった。然らば自分は自然主義的思想に満足して居たかといえ、決してそうではない。唯自分に親しい若しくは自分自身の思想感情を見るといふ点に於て、自然主義の作物が自分の興味を引いたことは事実である。

思うに自然主義の思想又は文学が、非常の勢力を揮つた強味は主としてここにある。其は時代の人心——少くとも文学を解する時代の青年の思想——に、この思想文学を受容れる準備があつた、即ち彼等の思想が自然主義的であつた点にある。自然主義の文学は思想界（青年

の)の要求に動かされ、この要求を幾分か充みたした。これは今更事新しくいう程の必要もないことで、此の点のみより見れば、往時のロマンチズム風の思想が青年の心を動かしたのと変りはない。自然主義の論者や作家はこの勢いきおいに乗じたものに外ならない。

それは兎も角自分は自然主義をば議論の上から覗うかがつて見たく、又論者の主張と自分の所思との交渉をも見たくて本書を読んだ。尤も自分は芝居や絵や音楽や彫刻のことは知らぬ。又歐洲近世の文学作品についても、聞き覚えに名を知ったり、梗概をきいたりしたものの外に、

自分で読んだものは実に少い。この点に於て著者と議論する気もなく、又あつたとしても今は出来ない。それ为主として研究の中の自然主義論、文芸と人生との関係論等について述べたい。それも文学美学の造詣は殆どないのであるから、要するに自分の所感の陳述というに止まるであらう。

二

著者は序にかえて、「人生觀上の自然主義」を此書このの

劈頭へきとうに掲げて居る。これは著者現在の人生觀の告白と見
 てよいものである。ここに云う著者の人生觀とは、主
 として実行上の道德觀である。著者は従來の道德に対し
 て全く疑惑の状態に居る、然も生活の方便としてはこの
 道德を脱することが出来ない、在來の人生觀上の自然主
 義というものも、畢竟ひつぎょうするに著者にとって疑惑の一
 面に過ぎぬと告白して居る。即ち著者の人生觀は自然主
 義と明言し得られる程のものでない。著者の言に従えば、
 著者には実行的の理想又は歸結を標榜ひょうぼうする人生觀
 はない。しかもこの事は著者に統一あり徹底せる人生觀

のないという意味で、著者に全然人生観なしということではあるまい。兎にも角にも何等かの人生観がなくして、其の人に文芸観のありようがない。著者をして宗教に赴かしめず、哲学に赴かしめず、ひとり文芸に赴かしめたとすれば、其は是非とも著者の人生観に基かねばならぬ。更に何故なにゆえに著者が自然主義の文芸を要求するかということとも、著者の人生観から導き来られねばならぬ。無論自分そのままは著者と同じく、人生観の其儘に文芸観でないことをば認め得る。さりながら人生観を離れて文芸観のあり得ず、又此の文芸観に基づいた自然主義文学のあり得ざる

ことは、著者の固もとより認められる所だと思ふ。著者は、此の序を以て文芸上の自然主義論に裏付けるといつた宣言に對しても、せめて本文中の文芸論との要点要点の合せ目だけでも、示しておく用意はあつて然るべきであると思ふ。此の点に於て此の一文は非常に物足らない。

著者は自己が伝習の道德を離れ得ぬ根柢をば、自己の生を愛するということ、即ち自己保存欲というものに歸して居る。しかし著者によれば、此の事にはなお知識的の疑問がある上に、又一向莊嚴な感じを著者に与えぬ。さればとて著者をば是が非でも引き回す程の力ともな

つて居るとは思えぬ。著者の現状を察するに、殆ど進むにも進むことが出来ず、退くにも退くことが出来ず、正まさしく手も足も出ないという有様であろう。自分の考では若し此の有様が一步を墮すれば、何を為するのも懶ものうく、生活力は減退して唯肉感の刺戟をのみ求め、唯このままに死んでしまうことを願う様な倦怠に陥るのではあるまいか。又は拘こうこう々々として心生活に何の落着きもなく、強しいてすべてを嘲あざけるけれども、その嘲笑の声の空虚なのに自分でウンザリする様な心持にもなるであろう。要するに更に進んで懺悔をなし、自己省察に入るには、どうし

ても此上に何等かの力や要求が加わり、何等かの開通が心に生ぜねばなるまい。

著者は今の自分は懺悔するに適して居るといつて居る。然し著者は今万事を抛擲ほうてきして懺悔せねばならぬと、差迫った心持を経験して居るとは思えない。「痛切に自己の現状を見よ、見て而しかして之を真摯に告白せよ」という著者の言葉も、自分には強く響かない。人は疑惑不定なるが故に懺悔（必しも宗教的の懺悔とはいわぬ）するものであるうか。疑惑不定の状態には、寧ろ一言を出すことも一語を洩らすことも出来ぬというのが、実際の心

持ではあるまいか。人が懺悔する時には必ず一種の強い肯定若しくは否定をやっては居ないであろうか。動機の分裂の多い今の人間に、懺悔は実に六カしいことと思われる。自分の考をいえば、今の人間は懺悔をす^なら為し得ぬ状態に居るであろうと思う。著者の「真摯に懺悔せよ」という言葉は、恐らく著者の理想であつて現在ではあるまい。

三

本文の最初にある「美学と生の興味」に於ては、美の人生に於ける位置、殊ことにはその道德功利の方面との関係が論じてある。元来著者の考は、概して快樂的、功利的、又実証的である。此論に於ては、著者のかかる見地よりした文芸観が窺い知られる。著者が生の哲理中に論じて居る宗教道德観については、別に何も言わぬことにする。生の増進ということが我々の生活の意味であるということは、誰にも異議はあるまいが、これがこの儘では、殆

んどトートロジーに過ぎないことも亦、また等しく認めねばなるまい。そこでやっぱり自分も著者と共に、生の増進をば、欲望の満足から来る快感によつて判ずる外はないということ为首肯する。

著者はシラーの遊戯説及びスペンサーの生活余贅説よぜいせつを紹介して居るが、慾には今少し詳しい批評が聴きたかつた。自分は著者の批評の中に、功利実用的ことばという詞が、狭い意味と広い意味とに混淆せられては居ないかと思う。例えばシラーの説の如きは、希臘風ギリシヤの善と美との一致の境を説いたもので、広義若しくは高義に於ける功利

と離すよりは、寧ろ美の極致に於ける之との融合の境を論じて居るものだと思われる。著者が後にミレーのアンゼラスの例を以て説明した文芸の第一義功利というが如きものも、其の近代的情調は別として、本質的にはどの位シラーの遊戯説と異なつて居るかということとは、更に著者の説明を待たなければ承知しかねることである。著者の所謂第一義功利と美とを結びつける説は道理だと思ふけれども、所謂第二義功利が美であるか否かは、まだ議論の余地が多いと思う。例えば著者の挙げて居る如く、操練の目的を有する踊が美であつても、この功利其物が

美の要素だとは必しも云い得られまいと考えられる点、又ギオーの味覚美説に対しても、視覚聴覚等に比べては味覚が美的であることの少い点などは、尚お考えねばならぬ所であろうと思う。

更に進んで一考すると、道德問題のイプセン、社会問題のゾラ、宗教問題のトルストイ等の作品が、其の道德的、社会的、宗教的なる故を以て、即ち著者の所謂第二義功利的たる其儘を以ては、決して文芸といえない点に見ても、畢竟するに文芸に残される功利は、著者の所謂第一義功利とのみはならぬか。この第一義功利に与あずかり

得るものは、どうしても人をして第二義功利を離れて、所謂觀照の態度に入らしめる。文芸の極致この一境をのみ残すとすれば、いわゆる生の哲理に基づく美学の特質はどれだけ際立つきわだてであろうか。此の点も今一層明かにして貰いたかった。著者の所謂美と功利との再合時代の功利と、リボー氏の第一期の功利と美との密着時代の功利との、意義の差違も明かにせられねばならぬと思う。

「芸術と実生活の界に横わる一線」の一論文は、著者が更に進んで実生活と芸術との交渉如何を論じたもので、前の論文の続とも見られる。

功利の為の芸術、芸術の為の芸術、自己の為の芸術、生の為の芸術の間の移行きは、大体に於てうなずかれる。著者が芸術と実生活との間には、自己を第三者化する一隙、即ち著者の所謂我的同情から他の同情へ移ることを要するといったのは、至当の論と思う。尤も著者のいう他の同情が、どれだけ物象を客観化し得るやは問題として後に残したい。著者は「芸術と実生活とは実に局部我より脱して全我の生の意義即ち価値に味到するという一線によりて区界せらる」といつて居るが、これは両方の界線というよりは、寧ろ芸術の極致或は理想だという方

が当って居ると思う。

四

「文芸上の自然主義」は従来世に出^いでた自然主義論中で、最も包括的で、又最も整ったものである。然しながら、あまり包括的たるを心掛けた為に、動^{やや}もすればあまりに抽象的になり、自然主義の特相の薄れた様な点もあると思う。

自然主義の純客観的描写と、主観挿入的描写とについて

ても、いいたいことがあるが其れは後にする。描写の目的題材に入つて、著者は自然主義の目的とする所は、ひとり真にある。理想といい現実という語は、要するに第二義のものであるといつて居る。しかし著者の所謂第一義の真は自分によくは分らない。「自然の真とのみでは物足らぬから、之を手に触れ目に触れることが出来る第二義のものに化して、以て製作上の実用に供せんとする」といい、「真という最後の目的が手の届く所に来れば、砕けて様々の形になる」という著者の詞にも、どれだけの的確を許し得べきかは疑問である。例えばこの分れた

ものは一々に真であつて、第一義の真とは、畢竟するに此等個々の第二義の真の集合名に過ぎないのか、又は第一義の真は一種の超絶的、本体的の者であるか。前者だとすれば第一義とはいえまい、又後者だとすれば、これを理想というも、知らざる神というも名前の差違ばかりになりはすまいか。かくて究^{きゆう}竟^{きやう}自然主義描写の目的は、他の文芸の描写の目的とどれだけ違ふであろうか。

著者は又表にした真の題下に、社会問題と科学と現実という項目を置いて居る。固より著者が此等を以て真の項目を網羅したと信じて居るわけでないとは、自分も思

う。しかし著者は現実と真とを如何に考えて居るのか。現実以外に真があるか、現実を離れて真はないか。現実と^{たわむれ}いい真というを唯詞の戯となさぬ為には、著者は更に説明する所がなければならぬ。尤も此の説明が遺憾なしに出来るか否かは疑問である。或る学者は、自然主義だといって別に新しい所は何もないといったと聞く。自然主義を其の根本本質に於て見れば、此の学者の言も^{あなが}強ちに^{しりぞ}却けられぬと思う。要するに自然主義の文芸との相違をば第一義的には見ない、第二義的に見るのが、自分の考である。

五

自分は進んで著者の自然主義の価値の論を覗おうと思
う。

著者の言に芸術は「客観的でなくてはならぬ。客観化
せられざる主観は斥けらるべきである」とある。かくて
著者は審美的主観として抒情的、情緒的、情趣的の三つ
を挙げて、自然主義の排する主観は前の二つにあるとな
し、「知的事象を歩々成るべく実験に近似して自然と思

われる方式に展開せしめ、一々相当の情緒の反応し来つて、事象と相即するを期し、さてかくの如き知的融会の第三段境を、忠実にそのまま表出しようとする」。又「かかる第四段境に達するまで描写の筆を取り上げず、さて第四段境の情趣から始めて忠実に写しかかるといふ場合には、主観挿入的即ち印象的自然となる」。されど極致はこの両境の一致にあるといつて居る。思うに近頃世にいう客観的印象描写という様なものが有り得るとすれば、恐らくはこの両境一致の場合であろう。

自然主義は其の描写の上に、科学的態度、知識的態度

を取る。しかし単に科学的態度知識的態度を取るといふならば、其れは科学である。吾人に具体的な生き生きした物の姿を与えることは六カしい。文芸としては之を裏付けるに、常に感情がなければならぬ。真を搜らんとし、微を発あばかんとする知的努力は、必しも文芸の描写に摂取し得られないものではあるまいが、これ等の努力が作者の気分の中に介在して、それが作者の主観と消化し合つて居なければ、完全なる文芸は出て来まいと思う。著者がいわゆる生そのものの意味に味到した気持といい、又は他の同情というものも、畢竟するに作者の豊潤な明澄

な無邪天真の、明鏡止水の如き主観、即ち直覚若しくは之より導き来られた気持というより外に説明は出来まい。此の意味に於ても文芸はやっぱり天才の仕事であると思われる。最上の文芸の生まれるのは此の境に於てではないか。そして吾人は此の極致に於て、あらゆる文芸の共通点を見る。更に進んでは哲学、宗教にまでも通じた境地を想望する。此の意味に於ては、自分は自然主義文芸の他と異なる特質を認め得られないと思う。

然しながら、我々が果して厳密に事象其儘を描写し得るかと問えば、結局はやっぱり作者の見た事象というよ

り外には出まい。自然主義の論者の、写実主義の唯物の外形を写して、その心を写さないという非難も、その心とは何ぞやと追究すれば、その落着き所は其の物を経験する作者の主観より外にはあるまい。他格的同情についての著者の説明もきいたが、物の心畢竟作者の心でないことを証明し得る道はあり得ない。世人の精確に純客観的であると思つて居る科学的実験の上にも、近頃は実験者の主観ということが測算の中に容れられると聞いた。況いわんや文芸上の描写に於てをやである。こんなことは固より分り切つたことであるけれども、近頃文芸上の純客観

的描写を論ずる人を見ると、談何ぞ容易なるという感に堪えぬから、序ついでに言い添えたまでである。

更に題材の上から見ると、著者はここでは自然主義の真をば、文明に対する自然、精神に対する物質、理想に対する現実の意味に認めて居るが、又更に進んでは本来の文芸の境に於ては、光明主義でも唯愛主義でも何でもよい。現実の実相を画けば、其れで自然主義の文芸といえるといつて居る。後の言は理論上又は自然主義の歴史の上からも、決して言い得られぬことではないと思うが、しかし自然主義の文学の近代文学としての特殊の価値、

我々現時の人間に特別の興味を与うる所以は、寧ろ著者の前の説明によりてより多く明かにせられると思う。解決理想を提供することが、自然主義の文芸の意味でないことは諒^{りよう}するけれども、内容の上に全く無条件主義だといふ穩当な言前^{いいまえ}は、畢竟言前たり理想たるに止まるのではないか。自然主義の文学を作った今日の人心は、決して事実をえりごのみしない様な状態には居るまい。但し作家として立つ時と、個人として身を処する時との、或る程度まで二元たり得ることは、自分も著者の言に従おうが、作者が作に耽^{ふけ}った時の態度が無念無想であるべ

しとしても、其の題材を選ぶに至るまでは、作者の個人的性格、周囲の境遇から支配を受くるのが事実ではないか。自然主義の文学者は殊にも、其の取材に於て時代の精神、時代の生活状態から殆ど圧迫を受けて居るとさえ言い得ると思う。時代の精神、時代の生活との密接なる交渉が、即ち自然主義論者の触れたという意味ではないか。自分は自然主義の価値特相を主として此の点に見る。されば自然主義の文学は、かたよ偏った強い動機から出て来たと見るのが、公平な穏当な例えば「真理の全体を尽くす為に醜をも描く」という様な理由に基づくと見るより

真に近い。科学的精神が、一種の重くるしい殆ど科学的迷信とでもいわれるべき形を以て、現代の人心を圧して居ることや、社会問題と^{いい}個人の解放という様なことが、見るまい聴くまいとしても能^{あた}わざる程の圧迫を以て進んで来て居ることを見ても、自分にはそう思われる。

思うに単に現実といつても、見方によつては、例えば心理的に、吾人の精神に切実なる経験という様な一般的意思に於ては、決して自然主義の特有物とはいいい得られぬであろう。例えばイプセンの作などは、^{きしよ}どうしても理想的と見られる分子が多い。唯彼の描いた奇峭^{きしよ}な或は

突飛な性格も、今の吾人の経験又は之に基づく要求、即ち吾人の現実を背景としてこそ、こしら拵えた人間としてでなく、或は拵えた人間としてでも吾人に没交渉でない人間として見られるのである。即ちかくの如くにして理想的でありながら現実的であり得るともいい得られる。されば自然主義の現実といつても、其の特異なる点は、いわば現代の現実たる点にある。

著者のいわゆる全体の人生の意義及び価値、即ち中間の説明を轍しての第一義が髣髴せられるとすれば、これはあらゆる時代に於て、其の時代の人心に最も切実な問

題、事象によりて示されるであろう。そしてこれが文学によつて示されるとすれば、それはやっぱり当時の切実な問題事象を材料として示されるに違いない。自然主義の文学が人生の全体の意義を示さば、それは現代の現実を以てする。この点に自然主義文学の一つの使命はあるであらうと思う。

六

自然主義の価値論の終に於て、著者は一般思想との連

絡を三段に説明して、一には因習破壊、新機軸發揮、二には現実を重んじ理想を斥けること、三には絶対神秘の一物を直指する点にあるといつて居る。ここに於て我々は初に歸つて、著者の人生觀上の自然主義を見ると、著者の人生觀と著者の説示した自然主義との間には、まだ多くの隔りのあることを認めざるを得ない。

其外時評其他についても所感があるがやめる。「囚とらわられたる文芸」は當時は随分の評判であつたが、自分には面白くなかつた。今になつてこれを見ると、其の内容も文章も、幼稚で見られない。自然主義を唱道した著者に

して、三年前かかる文章を書いて得意で居たことを見ると、時勢の転変、時代の力というものを切に感ぜざるを得ぬ。

ふちゆう 釜中に坐する様な熱さに根気が衰えて、頭がいうことをきかぬ。見当違いも見落しもある。あらば切に著者の寛恕かんじよを願う。

(明治四十二年七月十九日稿)

日本文学電子図書館

『近代文芸の研究』を読む

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館